

連携だより

令和3年

2月号

令和3年2月1日発行

独立行政法人 国立病院機構 
呉医療センター・中国がんセンター
地域医療連携室

〒737-0023 広島県呉市青山町3-1
TEL 0823-22-3816
FAX 0823-32-3070

URL <https://kure.hosp.go.jp>
E-mail 506-kure-renkei@mail.hosp.go.jp

2月の花 フクジュソウ

理念 
思いやりのあるやさしい誠実な医療を提供します



今月号のトピックス

- 呉医療センター 院内論文表彰受賞しました

精神科 医師	大盛 航	1
救急科 診療看護師	国島 正義	3
- がん相談支援センター紹介 緩和ケア認定看護師 中西 貴子 4
- クローン病の治験募集ご案内 別紙

呉医療センター 院内論文表彰受賞しました

当院では、毎年一年間の業績として、優れた論文を発表した職員に対し、表彰式を行っています。今年度は、医師・コメディカル職員9名が受賞しました。この度は、受賞した2名の職員をご紹介します。



特別論文賞

精神科 医師
大盛 航

令和2年12月24日の院内論文表彰で、特別論文賞・学位取得を受賞しました精神科医師の大盛航です。学位（医学博士）は大学で取得することが通例ですが、当院は臨床研究部を有し、広島大学の連携大学院として教育・研究活動にも力を入れています。自分は当院の臨床研究部・精神神経科学教室に所属し、大学での研究を経ることなく学位を取得することが出来ました。

自分の経歴をご紹介しますと、広島大学卒業後に広島西医療センターで初期研修医として勤務し広島大学精神科を経て平成23年7月から当院へ後期研修医として赴任し、以来9年以上もの間、当院に勤務させて頂いております。外来、入院、リエゾンと臨床は多忙でしたが、多くの症例を経験させて頂きました。平成26年4月からは常勤医として採用され、平成27年4月から広島大学大学院医歯薬保健学専攻博士課程医歯薬学専攻に入学し、臨床をしながら社会人大学院生として研究に携わるようになりました。その間、

精神保健指定医、精神科専門医及び指導医の資格を取得しました。平成28年10月精神科の臨床から外して頂き（一部外来業務を除く）、緩和ケアチーム専従医（精神症状担当医）を仰せつかり、並行して本格的な研究活動を開始しました。

自分の研究テーマですが、1つ目が電気けいれん療法について、2つ目が精神疾患のバイオマーカーについての研究です。電気けいれん療法は気分障害や統合失調症に対して非常に有用ですが、再発率の高さが問題となっています。そこで再発予防に関する研究を行い、気分安定薬及びメンテナンスECTが再発予防に有用であるとの結果が得られました。結果を論文:Shared preventive factors associated with relapse after a response to electroconvulsive therapy in four major psychiatric disordersとしてまとめ、令和元年にPsychiatry and Clinical Neurosciences誌に投稿し受理されました。

2つ目のテーマですが、気分障害、統合失調症などの精神疾患の診断や治療は主に医師との対話で行われております。近年、精神疾患においても血液サンプルなどを用いて、診断や治療マーカーの研究が進み、精神疾患との関連が報告されているものがあります。しかし血液は身体の影響を受けやすいという限界があります。脳をサンプルとして採取することは不可能なので、より脳に近いサンプルとして脳脊髄液（CSF）に着目しました。国立精神・神経医療研究センターとの共同研究で300例近い健常者、うつ病、統合失調症のCSFを得ることが出来ました。精神疾患は脳内炎症との関係が示唆されているため、サイトカインと密接な関係にあるマトリックスメタロプロテナーゼ（MMP）に着目し脳脊髄液MMPを当院にあるタンパク質多項目同時測定システムを用いて測定しました。MMPのうちMMP-2濃度がうつ病及び統合失調症で有意に高く、うつ病重症度と有意に関連していました。結果を論文:Increased Matrix Metalloproteinases in Cerebrospinal Fluids of Patients With Major Depressive Disorder and Schizophreniaとしてまとめ、令和2年にInternational Journal of Neuropsychopharmacology誌に投稿し受理されました。この間、得られた結果について国内外の学会で発表させて頂きました。特に米国で開催された北米神経科学学会（Society for Neuroscience）に2回参加させて頂いたのは非常に良い経験となりました。

2つ目の研究テーマについて学位授与申請し、広島大学精神科・岡本泰昌教授ご指導のもと令和2年11月無事学位を取得することが出来ました。これまで多くの方のサポートを頂き、心より感謝申し上げます。特に臨床、研究及び論文執筆にあたってご指導頂いた竹林実先生（前・精神科科長、現・熊本大学精神科教授）には大変お世話になりました。また最初の指導医であり、わたくしの生き方に大きな影響を与えてくださった町野彰彦先生（現・科長）にも、多くの貴重なご助言を頂きました。ありがとうございました。今後も臨床と教育・研究活動に精進していく所存です。





論文賞

救急科 診療看護師
国島 正義

この度、私が執筆致しました論文『身体計測に基づいた末梢挿入型中心静脈カテーテル（PICC）挿入長の予測式の作成』が日本臨床栄養代謝学会の発行する学会誌JSPENに掲載され、呉医療センターでの論文賞を拝受いたしました。

論文タイトルにあります末梢挿入型中心静脈カテーテル（Peripherally Inserted Central Catheter：以下PICC）というのは、上腕から挿入する中心静脈カテーテルです。以前は頸部や鎖骨下および大腿部から挿入する中心静脈カテーテルが主流でしたが、より安全で長期間使用が可能なPICCが最近では選択肢として多く使用されるようになってきました。当院では、救急科に在籍する2名の診療看護師が中心となり、他診療科の医師から依頼を受けてPICCの挿入活動を行っております。PICCの挿入件数は年々増加し、患者様への早期栄養介入や末梢静脈路確保困難な患者様が何度も静脈穿刺されないという苦痛の緩和と看護師の負担軽減、周術期の薬剤管理、化学療法の安全な投与経路として多く活用されております。



今回掲載された論文は、これまで我々が挿入してきたPICCの症例を基に、他施設で臨床に活かせる内容を発信したいという思いから執筆を致しました。論文を執筆するきっかけとしては、PICCをベッドサイドで挿入する際、PICCを何cm挿入したら適切なかがわからず、なんらかの指標はないのか探したところ有用な論文が見つからなかったため、それなら自分で指標を作ろうと考えたからです。当院では基本的に透視下でPICCを挿入しており、PICCの先端を適切な位置に留置することが可能です。そのPICC先端を適切な位置に留置している患者様のデータを基に分析を行い、身体計測から挿入長を算出する計算式の作成を行いました。すべての患者様が透視室に移動できるわけではありませんし、施設によっては透視を使えない施設もあると思います。そのような状況において、この計算式を使用すれば、どの程度の長さを挿入すればいいのかという指標になると思います。もし、この論文を活用して頂ける施設がございましたら、お問い合わせ頂ければ幸いです。

現在、当院からの転院の際、PICCを挿入されて転院される患者様もおられ、当院以外の施設でもPICCは活用されていると思います。PICCの管理などでお困りなことがあれば、ご相談頂けたらと思います。また、当院では研修医等へPICC挿入の指導も行っております。PICC挿入技術を身に付けたいご施設がございましたら見学や技術指導等も行いますので、併せてお問い合わせ頂ければ幸いです。



研修医へ指導の様子

がん相談支援センターの紹介



がん相談支援センター
緩和ケア認定看護師
中西 貴子

当院はがん診療連携拠点病院として、がん相談支援センターを設置し、院内外のがん患者及びご家族の相談を受けています。

2020年度は全国的に新型コロナウイルス感染症が蔓延し、がん患者さんの不安も従来のものに加えて、感染対策や社会活動の制限に伴うものが増加しております。受診行動一つをとっても躊躇される方が居られ、電話での問い合わせをいただくことも珍しくありません。一方で根治不能ながん患者さんからは、『限られた時間の中で、家族と貴重な時間を過ごしたい』との思いをコロナに阻まれ、焦燥感や葛藤を口にされることもあります。厳しい社会情勢の中、就労や経済的課題が浮き彫りになることもあり、MSW（社会福祉士）とも連携し、より細やかな対応が求められます。

当センターは2020年4月から、従来スタッフに加え相談員3人体制となりました。より充実した支援を目指していく所存でありますので、今後とも宜しくお願い致します。

救急外来へのご紹介について

救急車で搬送する患者さんのご紹介は、救命救急センター医師が症状等を直接お伺いさせていただきますので、「救急外来受付」まで電話でご連絡いただきますようお願い申し上げます。

平日 昼間	8:30~17:15	0823-22-3111
土・日および夜間	17:15~8:30	0823-23-1020



〒737-0023 広島県呉市青山町3-1
独立行政法人 国立病院機構
呉医療センター・中国がんセンター

地域医療連携室

中野 喜久雄 清水 洋祐
森下 早苗 折本 陽一
川島 美由紀
TEL: (0823) 22-3816